

これからの猪猟

〈15回〉

田宮 治

心に残る伝統の熊猟

旧中俣村は小俣、中継、大代、雷、山熊田からなる山間に点在する五村から成り立っている。こ

こは大自然の恩恵を受けて大切に暮らすのどかな山里である。さしたる産業もないことから、自然の恵みを大事に活用する狩猟は盛んであり、特に熊猟は昔からの伝統猟だった。

雪が積もって熊が冬眠する十二月中頃までと、春に熊が冬眠から目覚めて寝穴から出て来る五月連休頃に、全村あげて「熊の巻き狩り」をするのである。

この巻き狩りの手法は、代々受け継がれてきた手練た勢子たちと一人でも熊を撃ち獲れるプロの熊撃ち（マタギ）が五カ村から結集して総力をあげて実践するのであ

る。だから、この時期に足跡を見つけられてプロ猟師に見切られた熊は獲れて当たり前なのである。

伝統猟法とはそれほど凄いのであり、毎年同じ山々を手直ししながら、代々その猟法を改善している。これはまさに伝統から生まれた一級品のマタギ技術である。

今日の熊猟は十二月六日なのに、集落でも珍しい一日以上のドカ雪が降り、道路を車で走るのも大変で、熊を巻き狩る高い山ではカンジキを履いても深くぬかるんでしまい、タツの人たちはともかく、勢子たちは並大抵の苦労ではない。

今回の巻き狩り現場は、山熊田集落の奥山の雪深い高い所ではなく、村から二キロくらい道を下った中継集落との中間辺りだったので、いつも熊狩りをする山熊田集落の奥山の奥羽山脈まで続く山々

からすると楽なほうである。

そんなことから、ベテラン猟師たちが手分けして熊の潜んでいる

大山を中心にして、周りの大沢を沢奥まで時間をかけて丁寧に見切った上で、この大山を大峰筋で二分した奥に向かって左平の日常のりの良い山に熊が必ず潜んでいると判断し、できるだけ狭い範囲で勝負をかける作戦なのである。

作戦談議をしているのは、昨日の一報で全村から駆けつけて来た猟師十三人と勢子が十三人くらいである。いつもより人数が少ないのは、ドカ雪の中での巻き狩りのため、よほどの体力と経験がないと無理だと考えたようだ。

今日の参謀は山熊田集落きつての熊猟人である大滝氏である。ちなみに彼が作るカンジキは天下第一で、深い雪中の熊には欠かせない。私は今でも彼にお願いしてカ

ンジキを作ってもらい、いつもジープに積み置いて大切に使っている。

また、息子の太滝剛氏は甥の義信とは仲の良い熊猟の友達で、かつて私の所に猪猟に来てくれた腕の良い猟師である。さらに、熊猟で剛氏の友人に本門氏という黒川村の猟師がいるが、この人も猪猟に来てくれたメンバーである。この二人は満兄の教え子たちだ。

そんなすべての点で結び付いている旧知の間柄の大滝参謀が、勢子たちに指示しているのを見て、榮作兄は今日の勢子の大変さを感じたらしく、大滝氏が制止するの

もさかず勢子に回ったのである。何度となく熊との激戦を乗り越えてきた榮作兄も六十五歳になろうとしていたので、大滝氏が気遣ってくれたようだが、まだまだ気力と体力には自信があるようで、



伝統の熊獵。左から満兄、正喜氏、義信、獵友たち (1987年12月16日)

「俺が行かずに誰が行く」と言わんばかりに、好きなタツをとりやめてまで勢子に徹したのである。

栄作兄の獵の実力は子供の頃から付いて歩いていたのでよく知っていた。取りまきの獵人たちもみんな大歓迎である。

参謀の大滝氏は作戦の全容をてきばきと指示した後、勢子たちに「頼むぞ!」と言い残し、タツの獵師十一人を引き連れて熊の潜む

大山の裏側から大峰筋を目指して登り始めた。

今日の作戦は大山の真ん中を二分するよう、山下から奥まで続いている大峰筋を熊に絶対越えさせない守りで、登って来る熊をタツの全員が大峰筋に立ち並んで迎え撃つのである。

快晴の中で見上げると、大峰筋まではかなり険しい急斜面だが、熊に気付かれずに全員のタツを張

るためには、この山を知り尽くしている大滝氏は、この難所を突き進み登り切るのが一番良いと判断したようだ。

もう十二時になろうとしているが、新雪で日差しが眩しい。若者を先頭にカンジキで雪を踏みつけて道を作り、一列になって右に左に楽なコースを登り続け、一時間くらいでやっと大峰筋に出た。

そこで小休止し、参謀は小聲で、「小侯勢(満兄と正喜氏、義信と私の四人)が守る大峰筋の松林を一番目のタツ場としたので、後はよろしく頼むよ」と満兄に言い残し、さらに大峰筋を登って行った。

私たち小侯勢のタツ場は峰筋全体が松林で、見通しは悪いが、熊は暗い林や森伝いに逃げる習性がある。満兄はとくにこの場所には熊が必ず登って来て、あそこに逃げると確信したようで「あそこあそこ」と指さした反対側の山平一面が黒くなっている。

「あれは熊が一晩かけて雪を掘り起こしてドングリなどを菜食した掘り跡だよ」と告げ、そっと自

ら足音をしのばせて掘り跡から熊の抜けた足跡をたどりながら、「あそこ」に出て、この大峰を勢子たちのいる山下に向かっている。

これは必ずこの下を通過するか、まともなところに登って来るよ」と、にこにこしながら「お前と正喜氏はここで静かに待て。必ず来るから動かさず話もするなよ」と言い残し、義信と一緒に少し上のタツに向かった。

満兄たちの上は中継勢(四人)が二番目のタツ場を守り、その奥の大峰周りは山熊田と雷の熊獵師が守る完璧な実戦配備である。

一般的に考えれば、この獵場(山)では巻き狩りで追われた熊は、暗い山裾の小沢を登り、森や林伝いに一番奥の山熊田勢の守っている大峰周りを越えて逃げるはずだが、この深い雪中では高い大峰まで登れるわけがない。どう考えても、満兄の推測どおり小侯勢の待つているこの下六〇メートルの所を通るか、この松林のたるみに登って来るに違いない。

小侯勢は息を殺してタツの心得(話をするな、タバコを吸うな、

オシッコをするな、ミカンを食べるな、など)をきっちり守り、木化け、石化けよろしく松の木化けとなつて、自分の守る範囲を黙視して銃を確認していた。

もう三十分も経つというのに、大峰筋に登つて行つたタツの様子も山下の勢子たちの様子も全く分らない。参謀は無線を持っていてるので、勢子たちの動きは分かっているだろうが、無線のないタツの全員はただ静かに待つほかな

い。雪の急斜面を大汗で登つて来たので全身が寒い、ただただ我慢してじっと待ち続けていると、物音もしない静寂の中を小鳥の一群がパイパイと鳴きながら木々を飛び継ぎ、大急ぎで上方のタツマのほうに移動して行つた。

いよいよ勢子が来るかと直感した時、山下のほうから勢子の鳴り声が聞こえてきた。快晴で風もないのに、まるで遠くで人が話でもしているように時には大きく、時には小声で聞こえなくなるほどの鳴り声である。深い雪の急斜面で苦戦しているようで、鳴り声は

なかなか近づいて来ない。「来るぞ！」と小侯勢全員が銃を握りしめ、下方の山平を睨んでいた。

快晴の眼下は、山間に朝の作戦会議の村道辺りまでの雪景色が実に美しい。しばし見とれていて、と、突然、聞き慣れた栄作兄の怒鳴り声はつきりと聞こえてきた。「続いて行つたぞ！」「出たぞ！」とはつきりしないが、確かに熊の発見を知らせる栄作兄の怒鳴り声である。

小侯勢全員が「そら来るぞ」と無言で山下の守備範囲を覗き込んでいた時である。何と二番目の山上でタツを張る中継勢の若者一人が銃を持って、凄いい勢いで大峰筋を吹っ飛んで来た。

「何事か」と聞きたただす暇もなく、呆気にと取られている満兄と義信の所をすり抜け、正喜氏と私をも「どけどけ、そこを」と言わんばかりに強引に大峰筋を山下のほうへと走り去つた。

これには全員おつたまげて「何をするか！」と怒鳴りたいが、タツに立っている以上大声で止めることもできない。「どうした？」

と正喜氏に小声でささやくと、ズドーンと一発の銃声である。

一度タツに立つたからには何が起ころうと絶対に動かないで静かに待つことが原則である。バリバリと音を立てて、並び立っている四人ものタツマをすり抜けて銃まで撃ち込まれたのでは、さすがの満兄も義信と一緒に飛び下りて来た。

次の瞬間、「熊が行つたぞ！」と、大声で怒鳴る若者の声である。四人が二度びつくり。すかさず正喜氏が「何であいつがあんな所まで出しゃばつて熊を撃つんだ」と、今にも飛んで行きそうないだ。

その様子を満兄が即座に打ち止め、「若者が撃ち気に逸つてやつたことだ。許してやれ！ それよ、熊はこの下を上には抜けるぞ！ さあしつかり迎え撃てよ。俺たち(兄たち)は元のタツ場に居るか」と、急いで松林の大峰に登つて行つた。

その時である。一〇〇メートル先の出峰から熊が現れた。まだ銃の届く距離ではない。次の瞬間、

白い雪を蹴散らして真っ黒い熊が何と私たちの真下六〇メートルの所に飛んで来るではないか。「さあ来い、もう少し」と、撃つタイミングを推し量っていると、熊が急に方向転換して急斜面を一気に谷底めがけて飛び下りた。

正喜氏は「治、来い！」と言うなり、大きな体に銃を握りしめ、深い雪の中を谷底に一直線で飛び下りて行つた。しばらくすると「熊が獲れたぞ！ 治、ゆつくり下りて来い。崖で危いからな」と大声で呼んでいる。

上から見ると六〇メートルはなだからであるが、そこから切り立った断崖になっており、迂闊に下ることができない。それでも深い雪が幸いして、先に飛び下りた正喜氏のカンジキ跡を頼りに雪を踏み固めながらようやく谷底に着した。

そこには九〇メートルの熊が雪の上に横たわっており、その側には正喜氏が笑顔で立っていた。満兄と義信もすぐ後に続いて駆け下りて来て雪の上に横たわる熊を確認していた。(つづく)